

中国レポート——研修を終えて

清 水 稔

中国への旅立ち 一九八四年四月五日

(本)午前十一時、小雨のけむる伊丹空港をあとにして、私は単身、中国へ旅立った。史学科の西田・藤田両先生、仁科企画振興課長をはじめ在校生・卒業生二十余名のにぎやかな見送りが、いまや嘘のように静寂につつまれた日航七九三便の機内。一年間故国を離れて生活することの不安と、未知の資料に遭遇できる期待とが脳裏に去来する。雲海のなかを飛行すること二時間、眼下に広がる田園のあざやかな緑のじゅうたんと、そのなかを縦横に走るクリークの銀色とが、上海上空に來たことを知らせる。午後一時十五分、ジェット機は上海虹橋空港におりた。

アヘン戦争の結果、欧米諸列強から強制的に開港させられた上海。ここは中国の民衆が列強の侵略に抵抗した闘争の原点であり、その歴史は中国革命史の縮図でもある。かつて多くの革命家たちが、ここを拠点に自らの祖国を自らの手で解放するために心血を注いで奔走したはずである。いま、その歴史を研究のテーマに留学するべくやってきたのだと思えば、やはり感激は一入であった。機窓から見た広漠たる田園の鳥瞰とは異なり、タラップ上から見た景色は空港特有の平板なもので

あったが、曇天のせいもあってか、周囲の木立にも華中らしいうるおいが感じられた。

改築中の空港ビルの出口には、私の招請校である華中師範学院(以下「華師」と略称する)から來られた辛亥革命史研究室(以下「辛亥研」と略称する)主任の劉望齡助教と外事辦公室(外国人の接待・管理を担当するところ。以下「外事係」と略称する)の周開敏女史のお二人が(ともに五十歳前後であろうか)、にこやかな笑顔で待っておられた。私達はまずタクシーで両替のために潇洒な十五階建の錦江飯店に、ついで武漢行きの航空券を買うために中国民航上海事務所に出かけ



上海の繁華街—南京路と西藏路の交差点

た。ここから上海工業展覽館の尖塔がのぞめる。中ソ蜜月時代のシンボルである。車は再び道の両側にプラタナスが林立し、ヨーロッパの街並を思わせる旧租界内をすべるように走る。車窓からは建築中の高層ビル群がいくつも見える。数年前に来たときとは違って、クレインがひっきりなしに動いていたのが印象的であった。三時をすこし回ったころであるうか、車は呉淞江（蘇州河）を渡り、華東師範大学の外国人宿舎に着いた。ここで期待と不安の交錯する中国の第一夜を過す。

翌六日、定刻を三時間も遅れて上海を飛び立ったプロペラ機が、武漢の武昌側にある南湖飛行場におりたのは夕方の七時すこしまえであった。南湖の西方に果てしなく広がる薄墨色の丘陵に夕陽の残照がひときわあざやかな光彩を放っていた。私の研修先、華師の所在地に着いたのである。一九一一年辛亥十月十日夜、武昌新軍の兵士による革命蜂起が成功し、歴史の流れが専制君主制から共和制へと大きく転換した。その分岐点上にいま立っている。七十余年前のこの出来事に思いを馳せて車上の人となった。私を出迎えてくれたのは、華師辛亥研の三人の先生——会党の研究で知られる陳輝助教授、章炳麟を研究して

いる羅福惠講師（私と同年齢の彼は、いつも私と大学との窓口になってくれた）、教育史を専門とする陶宏開講師と——外事係の宋淑蕙女史であった。飛行機の延着が武昌側に連絡されていなかったため、彼らはマイクロバスのなかで三時間も待ったという。理由も知らされないままこのように「待たされる」ことは、中国では日常的事である。夕闇の迫るなか、赤いレンガづくりの民家が続く武昌の街並を通り抜け、三十分ほどで華師の外国人宿舎に着いた。大阪をたつてからまる一日半の旅程である。武漢遠しを実感して旅装を解いた。

華中師範学院のこと 宿舎は正門から、

プラタナスの並木が続くならかな坂を三十分ほどあがった、左手の方の高台にある。白灰色の三階建の西洋館は、素人っぽいつくりが随処に残る建物である。外国人宿舎として七〇年代後半に、レンガをひとつひとつ積み上げ人力を駆使してつくられたものである。現在でもこの工法は各地の高層建築のなかに生きづいている。バス・トイレ付きの3DK、2DK、1DKの部屋が十四室ほどある。一年間を通してこれらの部屋がすべてうることはなかった。住人は多くても八人程

度である。四月当初は、私を含めて五人がここに居住していたが、服務員（職員または従業員）が、コックを含めて二十余人もいたのは驚いた。日本流の合理主義で見れば、中国のどの職場にもこのような余剰労働人口がかなり存在しているように思えた。

宿舎の住人はすべてアメリカの英語教師である。そのうちエル大学出身の若いメアリー、スコット、ローレンスとは、専攻と趣味が共通していたこともあってすぐに友達になった。彼らは、実に陽気で社交性に富んでいる。中国の食事に苦勞していた私に、彼らはいつも手作りの料理を差し入れてくれた。また毎昼食後のコーヒープレイク、毎土曜日のパーティー、毎日曜日のサッカークの試合などにも、武漢大学（華師から自転車で三十分ほどの距離のところにある）の外国人教師らとともに私を招いてくれた。その見返りというわけではないが、私は彼らを武漢市内の革命史蹟によく案内した。大学側はそのために公用車を使用する便宜をはかってくれたが、私達はそれをことわり、自転車とバスを利用して街を自由に散策した。華師での生活の快適さは、もっぱら彼らとの交流に負うところが大きかった。したがって中国に来たというよ

りも、アメリカ村に來たといったほうがいいくらいであった。



華中師院外国人宿舍の外国人教師たち
(左端は宋教仁の研究で有名な
プライス教授、右端は筆者)

ここで華師の概要を簡単に紹介しておく。華師は、南湖のほとりの丘陵桂子山麓にある。その名の示す通り、構内には金木犀(桂子)が生い茂り、秋になると黄金色の小花が咲きみだれ、芳香がただよっている。百ヘクタールといわれる広大な敷地内のあちこちに、レンガ色や白亜の建物群がちらばっている。ここで五千六百人におよぶ学生と二千六百六十八名の教職員の共同生活が営まれている。

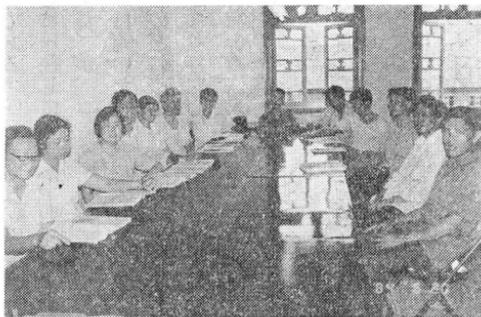
華師は新中国誕生後まもない一九五一年、

私立中華大学(一九二二年創立)・私立華中大学(一九二四年創立)・中原大学教育學院(一九四九年創立)の三校が合併してできた。主に中学校(日本の高校を含む)の教員を養成することを目的とした、教育部(文部省)に直属する師範大学の重点校(教師も設備も学生も優秀なモデル学校で、日本流に言えば名門校)である。十一の学部(教育学・政治教育学・中文・歴史学・外国語学・数学・物理学・化学・生物学・地理学・体育学)と六つの研究所(教育科学・科学社会主義・中国歴史文献学・歴史学・農薬化学・応用物理学)からなる。また三年修学の修士課程と二年修学の博士課程からなる大学院が設けられているほか、四千人あまりの学生を有する通信教育部と夜間部がある。さらに付属小学校・中学校・病院や商店・郵便局・銀行なども併設されている。中国の大学はそれ自体ひとつの地域社会を形成している。

閲覧・複写の制約 私は「教育部の承認をえた、華師招請の研究学者」として、歴史学部へ付設されている辛亥革命史研究室に所属し、「両湖地区における辛亥革命」を主題とする研究に従事した。したがって華師の外事係と辛亥研が私の留学中のすべてに責任を

負った。

華師に到着した翌晩、院長章開沅氏(辛亥研所属)らによる歓迎レセプションが開かれた。その席で、私の一年間の研修予定が確認された。それは、(1)武漢(華師)の滞在を半年間とする、(2)残りの半年は、北京(北京大学・北京鋼鉄学院)、広州(中山大学)、長沙(湖南師範大学)、上海(上海師範大学)、南京(南京大学)で研修する、(3)研修のための宿泊場所(前記の大学)・交通機関や図書館・研究所への手配はすべて華師が行なう、(4)



華中師院での日本語の授業風景
(受講生はすべて先生と院生である)

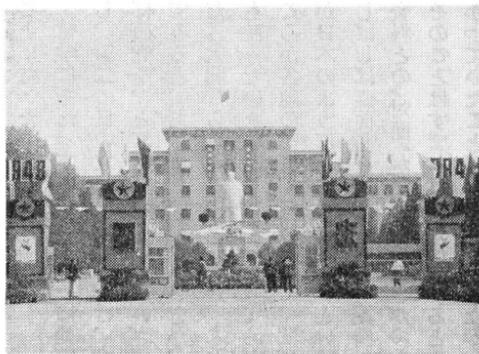
華師滞在中は週二時間の日本語の授業を担当する、(5)夏季休暇(七・八月)と春季休暇(春節)旧正月の前後二〇日間)の利用は自由とする、であった。私は訪中に先立って、辛亥革命期から五四運動期にかけての新聞・雑誌や地方議会の文書、とりわけ日本で見ることでできない資料を可能なかぎり閲覧し、複写したいという要望を提出していたこともあって、前記のような実に効率のよい研修日程を組んでくれた。ところが六か月間に五か所をまわるという、このスケジュールがいかにハードなことであるかを、その後の移動で知ることになった。

留学にあたっては、まず第一に健康に注意し、第二に日中友好にころがけ、余力あらば研究を、と考えていたのに、いざ中国に来てみると、あさましいといふべきか、はたまた「人間」らしいといふべきか、あれもこれも読みたいという思いに駆り立てられた。ところが各地の図書館や研究所で、閲覧や複写が日本のように自由にできないという現実にはしばしば直面し、閲覧・複写を期待していた資料との「対面」がかなわぬことが多かった。そのことはすでに日本を出発するときからわかっていたことではあるが、したがって私の

不満とあせりは中国各地を移動し、帰国が迫るにつれてしだいに醸成されていった。ここでは、一九四九年(中華人民共和国成立)以前の新聞・雑誌・古籍の閲覧状況について述べておこう。副本がないとか、マイクロ化を計画しているとかの理由で閲覧できなかったり、また閲覧が可能でも複写ができなかったこと、探し求めている文献がその図書館にあることを確認してきたうえで、その文献の閲覧を申し出ても、「没有(ない)」といわれることが多かったこと、また図書館管理の基本ともいふべき図書カード目録がなかったり、あっても不完全であること、服務員が資料の実態をよく理解していないことなど、日本に「感覚で資料の閲覧や複写を考えると腹立たしいことばかりであった。しかし前記の問題がたんに外国人に対してだけではなく、中国人研究者に対してもおおむね同様であることをあとになって知った。日中両国の社会体制の違いはあるにしても、貴重な資料がその国の財産としてその国の人のすべてに共有されるのは当然であり、また外国(人)との間にも平等互惠の原則にもとづく資料の相互交流と共有をはかる道が早急に切り拓かれねばならないことを痛感した。

北京・広州・長沙・上海・南京 七月二十三日夕刻、「三大黨」の一つといわれる「蒸し暑い」武漢をあとに、京漢線で一路北京にむかった。翌昼すぎ、さわやかな風の吹き抜ける北京の駅頭におりた。北京駅から、道幅百二十メートルの広大な道路が一直線に中央を貫いている長安街を通り抜けて、西北の郊外にある北京大学の外国人宿舍「勺園大樓」まで一時間あまり、久しぶりに快適なドライブを楽しんだ。もちろんタクシィ(西ドイツ製の車サンタナ)であった。高層ビル群の林立する北京の街並に日本の大都会を見る思いがした。しかし北大の宿舍に着いたものの、華師側の連絡の不手際から長期滞在は許可されず、数日ごとに宿泊を更新する形をとらねばならなかった。結局八月末には北大を追い出されるはめになり、やむなく北京鋼鉄学院留學生宿舍に移った。そこには歴史学部がなく資料の収集には不便をかこつた。

十月下旬までまる三か月間を北京で過した。もっぱら北京図書館の報庫(新聞類を保存している書庫)と中国社会科学院近代史研究所図書室で新聞・雑誌類の閲覧と複写にあけられた。朝八時から夕方五時まで、実に充



北京鋼鉄学院—十月1日の国慶節を祝う飾り
が実にカラフルで、夜になるとイルミネーションがつく。

実した毎日であった。その間、史学科藤田先生の引率による佛大学生訪中団の学生たちと久しぶりに「ふるさと」日本の香りを満喫したと、北京市内の寺院その他の史蹟をつぶさに見学したり、市井のすみずみまで歩き回ったこと、鋼鉄学院のチュニジアのハンサムな留学生たちと天津・瀋陽を旅したこと、五岳のひとつ泰山（山東省）に高熱をおして単独登山したことなど、いま懐しく回想される。

十一月十八日から十二月七日まで広州に滞

在した。それは広州の中山大学で開催される孫中山学術討論会に招請されたためである。

この討論会には外国人十五名を含む総勢百人ほどの研究者が参加した。六日間にわたり、革命の父といわれる孫文の政治思想や彼の歴史的作用などをテーマに、研究報告と熱い討論が繰り返された。いままでの研修生活のうちでもっとも実り多い時間であった。それは新資料との出会いに勝るとも劣らない、著名な研究者たちとの貴重な出会いであった。書物や論文でその名前を知っているとはいえず、言葉を交わすのははじめての人たちばかりである。李時岳・林增平・毛注青・李新・吳雁南・林家有・陳勝舜・肖致治等々の先生方、名前をあげればきりが無い。とりわけ華師の章・劉西先生の紹介で多くの第一線の研究者たちと親交を結ぶことができたのは望外の喜びであった。

広州は香港・経済特区に隣接しているせいであろうか、流行に敏感なウイイ若者たちが目についた。オートバイに若い男女が同乗して街を疾走しているのも、日本のようにタクシーを街頭でひろうことができたのも驚きであった。また一般中国人の使用する人民幣よりも外国人専用の通貨外滙兌換券のほうが幅



広州の中山大学で開催された孫中山学術討論会の会場。

をきかせ、外国製品が街にあふれている。これが社会主義中国なのかと疑う場面を見ることも少なくなかった。

十二月十三日から一か月間、湖南省都長沙の湖南師範大学で研修を行なった。学長の林増平氏（同大学中国近代史研究室所属）は、華師院長章氏と無二の親友といえることもあって、私の来校を心待ちにされていた。湖南図書館や湖南省社会科学院における私の資料閲覧に多大の便宜をはかれたこと、私の誕生日には夫人手作りの「長寿麵」と茅台酒による祝いの席を設けていただいたこと、黄興の郷里や辛亥革命ゆかりの地を公用車でご案内

ただいたことなど、林先生の熱烈な歓迎は忘れたくない思い出のひとつである。また雪の降る寒い日々、暖房のない図書館で、ホカロン片手に暖を取りながら資料を筆写したこと、宿舎のバスルームのお湯が出ないために、外国人教師たちと協力しあって自室までお湯をバケツでリレーしたこと、NHKの海外放送による大晦日の紅白歌合戦にノスタルジアを感じたことなども、いまは懐かしい思い出となった。

一月二十日からの三週間は上海師範大学



湖南師範大学学長林增平先生の書齋
(右が林先生、左が筆者)

で、三月十日からの三週間は南京大学でそれぞれ研修をした。上海図書館では閲覧と複写の制限が大変厳しくて閉口したが、南京の中国第二歴史檔案館(中華民国成立後の公文書を保存している資料館)での資料の閲覧は意外と簡単に許可され、私が閲覧を希望していた資料のほとんどに目を通すことができた。

ここでの閲覧は困難かもしれないといわれていただけに、喜びは一人であった。こんなことなら、もっと早く南京に来ればよかったと、悔まれてならない。しかしいずれの場合にせよ、上海社会科学院歴史研究所の湯志鈞・呉乾允両先生や南京大学太平天国史研究室の茅家琦・方之光両先生方のご尽力がなければ閲覧もままならなかったであろう。その配慮には感謝している。

研究生生活上の知恵

この一年間の留学生活のなかで、大学や研究所、図書館や檔案館における資料の閲覧や複写が、これほどまでに根気のいるめんどうなこととは予想だにできなかった。以下その過程で知りえた手続とその内実の一端を紹介しておく。

第一に、どの窓口でも必ず「紹介信」(紹介状)と「工作証」(身分証明書)がいることである。それによって「単位」(所属)と「身

分」の確認が行なわれる。私の場合、単位は華師で、身分は研究学者ということになる。

その紹介状も私の場合は、華師のそれだけでは不十分で、私の宿泊している大学の外事係か歴史学部の紹介状も併せて要求された。ある資料館では、すでに私が来館するとの事前の連絡を受けていた館内の知人が資料を準備して待っていたにもかかわらず、たった一枚の紹介状がなかったために、資料館の門をくぐるができないう悲劇を味わった。

また紹介状の発行の単位が、教育部系列なのか、社会科学院系列なのかは重要なポイントになる。なぜならこの両者の関係は、あまりよくないからである。したがってこれを熟知しておけば、研究活動をスムーズに進めうる。身分によって閲覧・複写に制限が加えられることもある。例えば研究者には複写は認めるが、留学生にはそれを認めないなどはそれである。

第二に、単位を異にする人に会ったり、また異なる単位で書籍を閲覧するときには、自己の所属する単位の外事係から、異なる単位の外事係にかならず連絡をとってもらうことである。それを無視すると、こめまた円滑にことを進めることができない。

第三に、強力な「路子」(コネ)があれば、本来ならば閲覧・複写ができないのに、それが可能になるという場合もある。これもまた研究活動を有利に進めるうえで重要なポイントとなる。

第四に、彼ら(服務員)は都合が悪くなる
と「規定」(規則)によって閲覧できません
ん」とか、あるいは「領導」(上司あるいは「ボス」)に聞いてみます」という。規定はあってもなきがごときもの、一度も規定と称する文面にはお目にかかったことがない。すべては領導の胸先き三寸にかかっている。その領導にコネがあれば、自己の期待するもののかかりの部分が可能にすることができ

る。
第五に、一にも二にも「忍耐^{おぼし}」することである。「だめです」「ありません」という言葉にめげず、何日も何日も通いつめ、彼らと顔なじみになることが大切である。そうなる
と、ときには、いままでだめだったものが可能に、なかったものがどこからかでてくることもありうる。実に魔訶不思議な世界なのである。

戦争の爪跡 留学中決して忘れ去ることの
できない思い出がある。私のように戦争を知

らない世代にとっては貴重な体験であった。

一度は、七月二十三日武漢から北京にむかう軟臥車(一等寝台車)内で濟南惨案(一九二九年五月三十日)で両親をなくした六〇歳ぐ
らいの女性から、二度目は、八月十八日日中戦争の発端となった蘆溝橋上で歴史教育の一環として小学生たちに戦争の経緯を熱っぽく話していた女教師の口から、三度目は、十二月二十日長沙の岳麓山を散策中に知りあった六二、三歳の男性から、四度目は、三月二十三日「侵華日軍南京大屠殺死難同胞記念碑」の前で(現在、ここに資料館が建設中である)ある老人から、それぞれ「日本鬼子」「日寇」(日本侵略者)の悪行の数々を聞く機会をえた。どういうきっかけからこの話を聞くことになったのかは覚えていないが、彼らは日本に対する恨みごととしてではなく、苦渋に満ちた表情をうかべながらも事実を淡々と語ってくれた。中国人の心の底では、戦争はまだ終わってはいないことを痛感した。

しかし一般に中国人は中日友好の建前から、日本人にむかって忘れたい恨みを口にはしない。だが中国人は日本の軍国主義の無残な爪跡を決して忘れてはいない。中国の歴史始まって以来の堪えがたい悲惨な思い出



「侵華日軍南京大屠殺死難同胞記念碑」ここに現在、資料館が建設中である(南京)。

が、中国人の胸から消え失せるはずはない。それは中国政府も日本の軍国主義の復活を警戒したり、民衆に対してもテレビや映画や劇により、あるいは展示により日本軍国主義の旧悪を暴露する教育を怠ってはいないからである。中国人にとって、日本軍国主義は抽象的な言葉や数値ではなく、自分の肉親が殺され、家を焼かれた具体的な実像なのである。この体験を通して、まだ日本の戦後が終わってはいないことをしみじみと感じた。戦後が風化しつつあるいまこそ、私いや私達は、中国人の

寛容や深い思いやりに甘えることなく、日本人として誰しも日本の犯した罪業の深さと眞実を後世に伝えていくことが責務であると考える。

さいごに 長くもあり短かくもあったこの一年間の思い出が、いま走馬灯のように脳裏を駆けめぐる。研修の思い出はまだまだ尽きない。とりわけ辛亥研の顔ともいふべき章開汎先生——その学識は国内外で高く評価されている、辛亥革命史研究の第一人者と、辛亥研の実務を担当しておられる主任劉望齡先生が、(私の研修を引き受けてくれた)各機関に出された適切な指示は、いつも有効に作用し、私の資料の閲覧と複写に多大の恩恵を与えてくれた。また私を指導する立場にあった両先生は、私をたえず「研究仲間」として「日本の親友」として遇された。辛亥研を訪れる国内外の著名な研究者は実に多かった。そのたびに両先生は私を友人として紹介され、研究会や討論会への参加を促された。これによって思いもかけぬ研究者の声咳に接することができたのも望外のしあわせであった。師範大学の重点校華師のなかにあって、こと中国における辛亥革命史研究の中心地である辛亥研は、突出した存在である。いま、

この研究室を中心に、辛亥革命に関する資料の一大センターをつくる試みが実行に移されようとしている。武漢は辛亥革命の発祥の地でありながら資料が少なく、しかも貴重な文献が各地に分散している。このような状況のなかで、この計画が実現すれば辛亥革命研究の飛躍的な進展がのぞめるであろう。

私は佛教大学と華中師範学院との間に結ばれた教員交流協定にもつき、一年間にわたる中国研修を終えて本年四月十日に帰国した。留学生活の一端はいままで述べた通りである。私の留学に先んじて、華師より趙軍氏がすでに本学に留学され、かなりの成果をあげて帰国された(一九八三年九月から八四年十二月まで滞在。学報34号を参照のこと)。今回の平等互惠を基本とする交換留学が、趙氏にとっても私にとっても、また両大学にとっても実に有効に作用したことは喜ばしいかぎりである。それはたんに資金面や運用面だけでなく、研究の深化においてもそうであった。なぜなら私の研究のテーマが「(湖南・湖北)地区における辛亥革命」であり、留学先の華師は、辛亥革命勃発の地であり、しかも中国における辛亥革命史研究に中心的な役割を果たしていること、趙軍氏のテ

ーマが「辛亥革命期における中日関係」であり、京都がその研究の拠点になりえたからである。ただ協定の運用面で問題点がなかったとはいえないが、何よりも趙氏も私もそれをはるかにこえる成果をあげたことである。今回のような教員交流は、今後発展が期待される形式のものであると思われる。これを契機にこのような、両国にとって、ともに有益で、かつ実りある交流が活発に行なわれることを望んでやまない。

さいごに交換留学に積極的な賛意を表された本学学長水谷幸正氏をはじめとする大学当局の諸先生方、とくに一年間にわたる私の留学を快諾され、あたたかく見守っていただいた史学科の諸先生方、また留学の窓口として私のめんどうな願いをいつも丁寧に処理していただいた仁科課長をはじめとする企画振興課の方々、また留学のきっかけをつくっていただいた京都大学人文科学研究所教授狭間直樹氏(もと本学助教)、教員交流協定書の作成に奔走していただいた本学教授吉田富夫氏、これら皆々様のご厚意は、筆舌に尽くしがたいものがある。ここに衷心より感謝の意を表したいと思う。

(しみず みのる 文学部助教)